

ビデオ屋

川崎ゆきお

和喜はむらっときた。

桜の花も咲き、生命の息吹を感じる季節だった。

久しぶりにビデオを借りようとスクーターを走らせた。

水銀灯で浮かび上がる夜桜が目眩しい。桜の匂いもする。

レンタルビデオ屋は何店もあったが、今は小さな店しか残っていない。不思議と潰れないものだ。

会員カードは切れているので、どの店でもかまわない。

小さな店は棚は少ないが、マニアックなのを置いている。和喜は何でもよかったので、一番近くの店にした。

まだ潰れていないらしく、テレホンカードの看板が立っている。ビデオよりこちらで食べているのだろうか。

表からは店の中は全く見えない。以前からあるのだが、それが怖くて入ったことはなかった。

恐る恐るポスターを張り付けた戸を開け、中に入る。

やはり狭い店だった。テープからDVDになっているので結構詰まっている。

しかし、レンタルかと思ったのが、全部販売品だった。会員カードを作るのも面倒なので、それがかまわない。

レジにはお婆さんが座っていた。

和喜は商品をレジ台に置いた。

お婆さんは後ろのカーテンを開けた。

和喜は驚いた。

若い娘が座っている。

お婆さんはメニューを差し出した。

そういうことかと、和喜は理解した。

娘と目が合った。

和喜はむらっとした。

お婆さんは手をすーと前に出し、和喜に催促した。

和喜は財布から万札を出そうとしていたので、その流れに乗った。釣銭がもらえない程度の金額だった。

和喜は女の手招きでカーテンの奥へ入った。

狭い階段があり、そこを上がるとカーテンに仕切られた個室があった。

組立式のベッドがあり、枕元にはおしぼりがいくつも積み重ねられていた。

和喜がベッドで横になると、カーテンが閉じられた。

しばらくして白衣に着替えたお婆さんが入って来て、マッサージを始めた。

了